



随分昔のものが好きなのだ。先日話だが、あの三角西港を見下ろす新聞に写真コンクールの特選をとった三枚の組写真が載っていた。確かドイッで撮影されたものだった。田園地帯を走る列車の窓辺で、一人の中年の男性が頬づえを突いて眠っている。その時突然窓外に豊かに流れるライン河が姿を現し、眠っていた男は、身を乗り出すかのようにして河の流れに眼を凝らす。男の表情からは、最早疲れと険しさは消え、溢れるような歓喜が身を包んでいる。

その組写真は、見事にまで男の表情の変化を捕らえていた。そして、その男のライン河への想い、あるいは水への想いを余すことなく語っているように思えた。しかも、僅か三枚の写真のみで。

亀井 創太郎

街のある海

若者に人気のある街、横浜にはベイブリッジがかかり、神戸には海が見渡せる異人館街が全国から大勢の観光客を呼び寄せている。福岡には、シーサイド街道に加え、ベイサイド・プレイス博多埠頭がつい最近お目見えした。それぞれが異国情緒溢れるおしゃ

れ空間だ。熊本の街で、もっと水や海に親しむ場が整備されていくという目撃した時、私達の表情はもとどろきやかなり、都市の魅力が増すに違いない。(亀井通雄社長)

川の流れや光る海を眺め